

明治に大流行した「名古屋甚句」を、唄ってみませんか

二葉館では、今年の3月から月に度、「正調名古屋甚句を拡める会」代表の甚富華さんを講師に迎え、無料講習会を開催しています。正調名古屋甚句は文化年間(1810年)頃に唄われはじめ、明治9(1876)年頃に大流行した、当地を代表する伝統芸能。10月12日の名古屋まつりの日には、兄弟弟子さんたちといっしょに、当館で講習者発表会を行う予定もあります。



●貞奴のお気に入りだつたという二階の和室で、三味線の伴奏に合わせて唄うのは、最高の気分。

●正調名古屋甚句は、

節をとるのがとても難しい前唄、本唄、様々なバリエーションがつけられたという替え唄2種、そしておなじみの名古屋弁が次々でくる別唄で構成されている。合わせて約10分を一気に唄いきる。



三、五張大拍子
余の結縁のいうこと聞けば エー
アイ 文明化のせとなりて
高い城から下ろされて
科ない私に靴をかけ
離れ離れの箱のうち
蒸気船にと乗せられて
東までも運られて
博覧会にさらされて
幾十万の人々に
絨じや絨じやと指差され
こんなにはかしいことはない
いっせ死んだが ましかいな
一人で死ぬのは 上げれども
御前と一緒は 死んだならア
人がしんちゆうじやとヨロヨ
アイ いうであらう エー ホホ
トコドツコイ ドツコイショ

大正のきものに見ほれる

6月17〜22日、「貞奴が愛したきものたち」と名づけた展覧会を開催。最終日には長年きものを愛好されて、造詣の深い宮地利枝さんをお迎えし、その歴史、着方の変遷、貞奴のきものについてなど、話していただきました。今回は春夏秋冬が主の展示。全般に色目こそ地味ですが、生地、質の良さがうかがえるものであったり、今とは少し違う仕立て方であったり、よくよく見ると柄の一部に繊細な刺繍がほどこしてあったりと、きもの魅力の奥深さが感じられる展示となりました。



●塩沢お召しの単衣に、花色の長襦袢。生つむぎの名古屋帯姿の宮地利枝さん。「きものは『着手』の精神性、その内奥がにじみでてくるように思います」という言葉とおりの、見事な着こなし。



次回、秋冬物の展示は12月2日〜7日の開催を予定しています。どうぞお見逃しのないように。

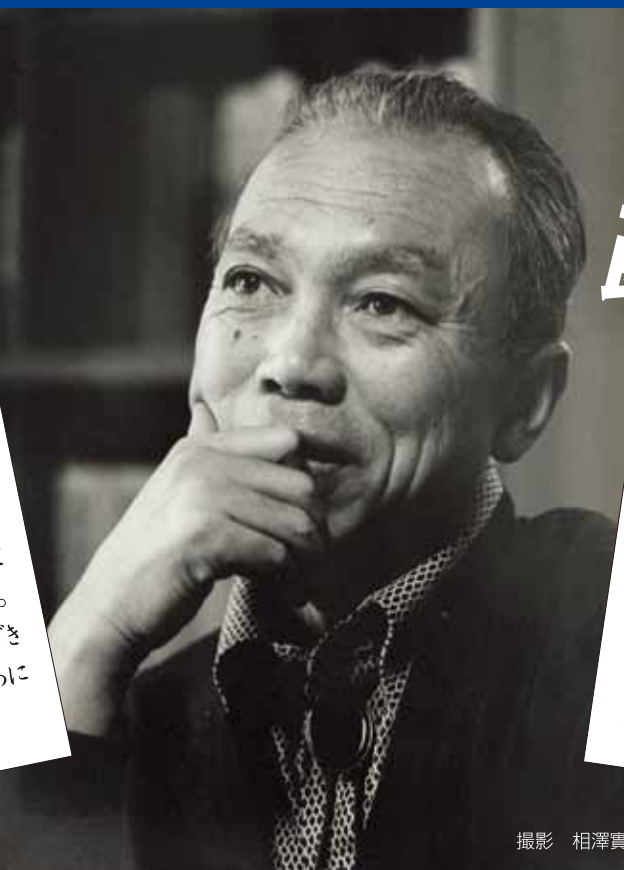


写真左 ●宮地利枝さんのお話に熱心に聞き入る参加者のみなさん。
写真上 ●展示室で貞奴の着物を見ながら宮地さんの説明を聞く。
写真左 ●きもの展ですっかり「夏のしつらい」となった、2階和室。



昭和を代表する作家、城山三郎

城山三郎氏がなくなつて、一年。その業績を偲んで、2月8日から3月23日まで、「城山三郎展」気骨の作家、ここに在り」を開催いたしました。その間の来館者は8453名。連日のように命を粗末にする事件や、汚職事件などが報道される今こそ、城山三郎(の書かれたもの)に会いたい人がたくさんいるのだ、と気づかされました。



撮影 相澤寛

城山三郎の蔵書を拝見させていただきました。そこで感じたのは、「愚直に、誠実に生きることのすばらしさ」。大げさに言うつもりはないですが、今の日本の社会が干からびている、と感じるならば、城山氏の作品を読むべきだと思います。 S.Y.

ガルシア・マルケスの本に、贈った人のはさんだ手紙と、城山三郎ご本人のメモがあり、その内容、本には含まれたメモなどを読むことができ、うれしく思いました。貴重な資料、これからも大切に伝えていただきます。感謝です。 K.E.

私の父もミッドウェー海戦で戦い、腕の肉が半分ほどありませんでした。子どものころ「どうしたの?」と聞いても、「ネズミにかじられた」と言い、ずっとそう思っていました。(中略)父は「生きて帰ったのだから、恩給はいらない」と、貧しくても一円ももらわずに死んでいきました。そんな国になるとくれた日本国。まさか、こんな国になると思っていなかったでしょう。「温故知新」。どうしても、今の生活に甘んじることはできません。城山先生の本を支えに、まじめに生きてゆきたいと思ひます。 I.Y.

倉庫棟から

「本を読み、語ることを、人生の糧に」 文学ボランティア 大澤 裕

「二葉館の読書会」第一回目が、6月14日、二葉館集会所で行われた。この会は、本好き、文学好きの有志が月一回程度集い、郷土ゆかりの文学者の本を読んで、自由に感想など語り合い、人生の糧にしようというものだ。そのための約束は、「みんな平等」「遠慮無く発言」とした。城山さんが40年続けた読書サークル「くれとす」のようになればという想いもある。

第一回目に取り上げたのは、城山三郎著『そうか、もう君はいないのか』だ。

「読みやすかった。城山さんの女性観、私生活もストレートに書かれていたと思う。理想の女性は母親であり、容子さんの中に母を求めているのでは...」

「交流会のとき、「ぜひ奥様のことを書いてください」と、話した。読みやすかった。城山さんの女性観、私生活もストレートに書かれていたと思う。理想の女性は母親であり、容子さんの中に母を求めているのでは...」

「二回目は7月13日に開催され、課題図書は城山三郎著『総会屋錦城』であった。3回目は、8月10日、課題図書は城山三郎著『創意に生きる』である。本さえ読んでくれば、誰でも参加は自由(会費は当面なし)。」

本が好き、本を語るのが好きな同志諸君、ぜひご参加を。

